

平成29年度鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター公開セミナー  
「キリスト教と教育」

基調講演 「自分の容量を超えて相手をーケアの精神とキリスト教の人間観ー」  
白百合女子大学学長 田畑 邦治

日 時:2018年2月23日(金) 14:00～16:30

於 :サンタマリア館 階段講義室

【開会の挨拶】

末吉:皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、平成29年度キリスト教文化研究センター公開セミナーをさせていただきます。主催は鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センターです。司会はこども学科の末吉です。どうぞよろしくお願いいたします。今年度の公開セミナーはテーマを「キリスト教と教育」ということで講演させていただきますけれども、この講演会を始めるに当たりまして、松下栄子学長にごあいさつを頂きたいと思いますので、松下学長、よろしくお願いいたします。

【松下栄子学長挨拶】

松下:改めまして、先生方こんにちは。本日は白百合女子大学の学長・田畑邦治先生をお迎えして、キリスト教文化研究センター公開セミナーを開催できますことをうれしく思っております。田畑学長先生、ようこそ遠路、薩摩川内市にお越しくださいました。先生には年度末のご多用の中、本学の依頼を快くお引き受けいただき、心から感謝申し上げます。また、ご参加の教職員の皆さま方には入学試験等を含む年度末の業務でお忙しくしておられるかと思いますが、本日の研修はこの1年を振り返り、新しい年度への気持ちを新たに作る良い機会ではないでしょうか。この後、ご紹介があるかと思いますが、講師の田畑学長先生は長年にわたりカトリック教育に関する研究を重ねてこられ、ご著書も多く出版されておられます。また、以前二期6年にわたり日本カトリック教育学会の会長も務められ、日本のカトリック教育の発展にご尽力されておられる先生です。

私は、田畑先生とは毎年開催されます日本カトリック大学連盟の総会で一緒にさせていただく機会がございます。ここ数年来、教育界も厳しい競争社会のさなかにあります。このような中で、白百合女子大学も本学も同じカトリック精神に基づく教育を行っている大学として、お互いに協力、連携を深めて進んでいけたらと考えております。

本日の講演の「自分の容量を超えて相手を——ケアの精神とキリスト教の人間観」と題するテーマは、建学の精神を理解し実践できることを目的にした本学のFD、SD研修にふさわしいテーマでございます。私どもが日々関わる学生の教育に貴重な示唆を頂けるものと期待を持っております。田畑学長先生、本日のご講演、よろしくお願い申し上げます。

#### 【講師紹介】

末吉: どうもありがとうございました。それではご講演に入る前に、今日ご講演いただきます田畑先生の紹介をさせていただきます。紹介は岡村先生です。よろしくお願いします。

岡村: では、本日の講師をされる田畑邦治先生のご紹介を私のほうからさせていただきます。先生は1947年に北海道函館市にお生まれになりました。少年時代には函館山の麓のカトリック教会に通われ、フランス人宣教師やシャルトル聖パウロ修道女会のシスター方と交わりを持たれたそうで、先生が今学長をされている白百合女子大学がそのシャルトル聖パウロ修道女会を設立母体としていることに不思議な縁を感じると、白百合女子大学のホームページでの先生の自己紹介の中に記されております。

1974年に上智大学大学院哲学研究科修士課程を修了された後、上智大学中世思想研究所職員、聖母女子短期大学助教授、同大学教授を経て、2000年4月より白百合女子大学の教授に就任され、2016年からは学長を務めておられます。

先生は、さまざまな社会活動をされておられます。2003年からはNPO法人「生と死を考える会」、この会は特定の宗教にとらわれずに、身近な人を失った者同士で悲しみを分かち合おうとつくられた会だそうですが、その会の理事長を昨年まで勤められ、また日本カトリック教育学会の会長などを歴任され、現在でもケアの哲学学会の代表を務めておられます。

先生は宗教哲学がご専門ですが、宗教や宗教教育、哲学に関する著書ばかりでなく、看護論・精神看護学、またケアの精神や実践についての著書も数多く出版されておられます。また『源氏物語』や西行、芭蕉などの古典を通して、「日本人の人生観・死生観」を探る活動にも力を注がれ、数多くの講演や雑誌などへの寄稿を行っておられます。

本日は「自分の容量を超えて相手を——ケアの精神とキリスト教の人間観」と題しまして、ご講演を頂きます。先生が長年、宗教哲学だけでなく、死生観やケアの倫理といった私たちにとって身近で避けて通ることのできない問題を研究されてこられたこと、白百合女子大学の学長として大学の運営・経営にも関わってこられたこと、そし

て何よりも敬虔なカトリック信者としてキリスト教的人間教育に尽力されてこられたこと、そうした先生のご経験をもとに、「キリスト教の人間観」という視点から、私たち教育に携わる者が抱えるいろいろな問題について、温厚で素敵な語り口でお話しいただけるものと思っています。先生、どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

## 【講演抄録】

はじめに—三人の画像から

皆さん、こんにちは。ほとんどの方とは初めてだと思います。どうぞよろしくお願ひします。ただ今、松下学長、そして岡村先生から身に余るご丁寧な紹介をいただき、ありがとうございます。今日は鹿児島に来るのを大変楽しみにしておりました。最近、いろいろなことで九州と縁が深く、特に鹿児島は、後でも触れますけれども、フランシスコ・ザビエルによってキリスト教が初めて日本に伝来した場所ということで、日本のカトリック教会にとってたいへん深い意味を持つ場所であります。また、少し北に行くと水俣がありますけれども、最近『苦海浄土』をお書きになった石牟礼道子さんが亡くなりましたね。ちょうど1年ほど前にこの『苦海浄土』という本を初めて読んだのですが、こんな素晴らしい文学だとは実は知らなくて、機会があれば水俣のほうにも行ってみたいと思っています。

加えて、いま鹿児島は、西郷隆盛さんがまたたいへんな話題となっています。またという失礼ですが、西郷さんは、何回も何回もテレビや小説で扱われ、今年はまたNHK大河ドラマ『西郷どん』で人気沸騰しています。そういうこともあって、今回こちらにおじゃますることを楽しみにしておりました。

今日は、この公開セミナーの全体テーマになっている「キリスト教と教育」ということについて、これまで私が学び経験して考えたことについて、3つの観点から自分なりにお話しできればと思っています。3つというのも、実はこの皆さんのお手許に配布していただいたレジュメに3人の人物の画像があると思うんですね。最初に、西郷さん、これは本日の導入のような意味合いです。それから2人目はエマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Lévinas, 1906-1995)という哲学者が登場します。ユダヤ系フランス人で、皆さんご存じの方もいらっしゃると思いますけど、私がとても尊敬する哲学者で、今日の中心的な話題になるかと思います。3人目は、トマス・アキナス(Thomas Aquinas, 1225頃-1274)です。トマス・アキナスは13世紀の方ですからもちろん写真ではありませんが、立派な絵が幾つか伝えられています。この3人に即

して3つのことを話したいと思っております。

## 1. キリスト教の三要素

今日は「キリスト教と教育」ということですが、キリスト教というのは一体どのような宗教かということ、いろいろ経験してきて思うことは、第一に目立つことは、キリスト教は聖書の宗教だということです。最初、ユダヤ教があって、それが母胎になって、後でイエス・キリストが登場して、キリスト教が生まれていきます。その二つに共通しているのは聖書ということです。

それから第二に、キリスト教がキリスト教として歴史の舞台に生きてくるに当たって、大きな影響を与えたのがギリシア・ローマの思想や文化です。この異質なものの出会いによってキリスト教は世界宗教になっていきます。その際、まず中心になったのは西洋のキリスト教ですが、そこには、聖書だけではなく、理性というか、人間精神の可能性について考えたギリシア的な精神が色濃く反映しています。だから、キリスト教派は駄目になった、という人もいるんですね、不思議なことに。キリスト教は聖書だけでよかったのに、ギリシア哲学などという異邦人の哲学を取り入れたばかりに難しくなってしまって、キリスト教の純粋さが失われたという見方もあるわけです。一理あるかもしれませんが、表面的な理解です。例えば今日、カトリック教育ということを考えますと、哲学抜きにカトリック教育はあり得なかったと思いますね。ヨーロッパで大学をつくったのはキリスト教ですね。理性の府、学問の府を創立したのはカトリック教会です。特に修道院が大学を始めたと言われます。これは、とても大きなことではないでしょうか。しかし、キリスト教はあまり学問とは関係がないと思っている人は、大学の中にもいるんですね。宗教は特別な人がやるようなことであって、理性とか学問とは関係がないんじゃないかと思っている人は少なくありません。

しかし実情は、ギリシアとの出会いによってキリスト教はたいへんな広がりを持ったのではないかなと思います。ですから、聖書的なものとギリシア的なものがあいまってヨーロッパ精神をつくって、そしてこのヨーロッパ精神が後々、マイナス面もあったかもしれませんが、世界的な影響を与えていく。もちろん、キリスト教は本来ヨーロッパの宗教ではなくて、始まったのはむしろアジアですね。ユダヤ教の中心はイスラエルですから、厳密に言えばキリスト教もアジアから始まったといってもいいわけですが、歴史的な流れとしてはヨーロッパ中心のキリスト教が出来上がった。そして、それが世界的な影響を持って私たちのもとに來たわけです。

以上の、聖書的なもの、ギリシア的なもの、そして第三は何でしょうか。聖書にも書いてあることですが、「全世界に行って、全ての人を私の弟子にしてください」とイエス

がおっしゃったときの、その「全世界」です。全世界と言うとき、もちろんギリシアもそうですが、アジアもアフリカも全部含まれる。そして、そこにはさまざまな文化とか風土とかあるわけです。そして、このそれぞれの世界の、各地の文化とか宗教とかを大事にしなければ、それはキリストの言う「全世界に行って」ということにならない。自分の考え方を押し付けるのではなくて、その土地、その土地の、そこにすでに息づいている文化とか息づかいを大事にしないで、それは本当の宗教とはいえないんじゃないか。そして、キリスト教はそれをできるだけ大事にしてきたと思います。

聖書的なもの、そして理性とか哲学とかギリシア的なもの、そして私たちが生きている文化とか風土。この3つが相まって現場に即したキリスト教というものを成り立たせていると思うんです。

私もこの3つを自分の人生の中で、いろんな機会に経験してきたと思っています。最近、私は日本の古典についてのエッセーを書きました。そこには『源氏物語』とか『古事記』とか、西行、芭蕉とかが出てきて、この著者は一体何の宗教の人なのか分からないかもしれないぐらい、日本の文化についていろいろ書きました。それは私にとって不可欠な道だったと思っています。『源氏物語』とか松尾芭蕉をある程度勉強することとは、日本におけるキリスト教を考える上で不可欠ではないかと最近は思っているんです。

## 2. 西郷さんという器

今日、私、ここに持ってきましたけども、内村鑑三という有名な日本のキリスト教の思想家の主著の一つに『代表的日本人』という本がございます。ご存じの方も多いと思います。最近これを読んでびっくりしたことがあります。びっくりしたというのは私の無知のせいですけども、内村鑑三さんはご存じのとおり、無教会主義者ですね。非常に個性的で強烈なキリスト教の思想家でして、形式としてのキリスト教を嫌いました。ですから、非常に真面目で強烈なキリスト教の指導者とはばかり思っていました。が、あに図らんや、この『代表的日本人』を読んでびっくりしたことは、5人の日本人が紹介されているのですが、トップバッターは西郷さんです。そして、あとの4人はまず、上杉鷹山、江戸時代の米沢藩の有名な殿様です。それから3人目は二宮尊徳、小田原の農業開拓者で思想家、皆さんご存じだと思います。それから4人目は中江藤樹という江戸時代は近江の国の儒学者、教育者。そして、5人目は何と日蓮上人ですね。他にたくさん宗教者もいるはずなのに、親鸞とか道元ではなくて、なぜ日蓮なのかはちょっとまた面白いんですけど、内村鑑三さんは日蓮さんに似ている要素があると言われます。激しさとか純粋さとか、そういう点もあるかもしれません。とにかく、

この『代表的日本人』のトップバッターが西郷さんということが、ちょっと私も驚いたことです。

この本、何のために書いたかといいますと、内村鑑三はキリスト教によって初めて日本にキリスト教がやってきたのではないということを言いたかったようです。キリスト教を知らない前から、日本にはこんなに素晴らしい人物がいたんだ。キリスト教に通じるような素晴らしい人格者がこんなにいたんだ。もちろんキリスト教とは違います。キリストはまだ十分に知られていなかった、この5人には。ただし、それを準備して余りあるほどの優れた人物たちがこの5人なんだ。その第一の人物が西郷さんだということです。

きょうのテーマ「自己の容量を超えて相手を」は、1年半以上前にこちらの岡村和信先生からこの講演会のお話があったときに、すぐ頭に浮かんだテーマでした。それが、私が今まで研究してきたことのまとめのようなことにもなるのですが、西郷さんのことをちょうど思っていました。西郷さんについては、書かれたものが膨大です。このたびのNHKの大河ドラマになってからだけでも西郷さんの本が何十冊も出ているぐらいです。

皆さんご存じのとおり、西郷さんの有名な言葉に、「敬天愛人」という言葉があります。皆さんよくご存じですね。焼酎の銘柄にもありますね。実はもう三十数年ぐらいになるんですけど、私のところに長男が生まれたときに、西郷さんのことを思い出しまして、「敬天愛人」の敬という字と愛という字をいただいて、敬愛という名前を付けたんです。そのときから西郷さん精神は素晴らしい、うちの息子も少しでも見習ってほしいと願っていたのです。

「天を敬って人を愛する」。この天という言葉が実はこの『代表的日本人』のキーワードになっています。この優れた5人の偉大な日本の人物たちに共通していることは、自分勝手に何かするということ、あるいは自分が中心になって何かをするということではなくて、人間を超えた大いなるもの、それは人によって違うんですが、大自然であつたりとか、宇宙の法則であつたりとか、いろいろあります。それから神様とか仏様のように考える人もいるわけですけど、とにかく自分を超えたものの計らいを大事にして、そしてその下で自分を使っていただくという考え方ですね。私たちの近代の人間観と随分違います。近代では「我」「私」が中心になるのが当たり前なので、天という言葉を使うと古いイメージがあるわけですが、この5人に共通しているのは皆そういうものだったのです。

天とは何かという難しい議論はされていないと思います。中国の儒教などから来たといわれてますが、とにかく人間を超えた法則とか原理とか、そういうものがあるんだということ。要するに、人間も大きな天の秩序の中の一つだと。だから天を敬う、

天の法則を敬うことによって、私たちは初めて正しい道を歩めるんだ、と。

そもそも、この「敬天愛人」という言葉はいつ西郷さんのものになったかは諸説があるようですが、いろいろな本を読みますと、彼は2回ほど奄美大島とか沖永良部島とかに流されています。島津斉彬のあとの殿様である島津久光とそりが合わなかったようですね。その島流しの間に読んだ本があります。細井平洲が米沢藩の藩主のために書いた改革の書を読む機会があって、この中にこういう思想があって、天を敬って人を愛するってことが政治の基本になるべきだということを深く悟ったようです。

私はここで思うのは、西郷さんは、一般のイメージとしては、あまり学問とか読書とかというよりは何か政治的な活動家のイメージが持たれていますが、そうでもないのではないかな。この島に流された時代の読書に典型的に表れているように、彼はいろいろな不遇な時期に座禅を組んだり、本を読んだりしています。この特に沖永良部島時代、30代の後半だったと思いますけど、このころに彼には深い読書体験があったのではないかな。読書ということ、先にキリスト教にとっての聖書について触れましたが、これはものすごく大事なことでないかなと思います。教育にとってもそうですね。何か図書館で本を読んだりすると眠くなりますよね。学生も図書館で寝てる学生がよくいますけれども。それでもいいと思うんですけど、とにかく、静けさの中でじっくりと本を読むということが人間にとって決定的に重要だと思います。西郷さんが流された時間に本をじっくり読んだということが私はすごく重要なことだと思っています。彼の「敬天愛人」という考え方は、そういう読書の中からゆっくりと自分を見つめる中で磨かれたものだったと思います。

西郷さんについて鹿児島の方の前で話をするというのは、恐縮なことです。西郷さんを聖人君主のように美化するのもよくないと思いますけど、それにしても西郷さんほど、男にも女にも愛される歴史的人物はあまりいないですね、日本の歴史を見ても。それほど魅力ある人物として私たちに伝えられてきたのにはそれなりの理由があったということですが、これがやはり今日のテーマである「人間の容量」と関係があるのではないかな。器の大きさというのでしょうか。例えば、司馬遼太郎さんが西郷さんについていろいろ書いてますけれど、こんなことを言ってますね。

「西郷さんは特別秀才でも腕白でもない。むしろ自分は能力のない人間だと思い定めていたらしい。しかし世間にはいろいろ能力のある人間がいる。そこで彼はそういう人々を使って、何ごとかできないかと考えた。ところで、そういう人々のエネルギーを使うには、私心というものがあってはダメだ」。「これはいつ悟ったんでしょうか。それは西郷の大変な英知だと思います。考えるに私心というものがあって、人間なんですね。食欲があり、性欲があって人間である。……そういう私心のかたまりのよう



な体の中に、2パーセントぐらいの真空状態をつくろうとすれば、それは脂汗の流れのような大変な努力だと思うんです。しかし、2パーセントぐらいの真空ができると、その中にサーッと吸い込まれるんです。西郷さんはその2パーセントか3パーセント、とにかく人間がなしがたいことを彼の内部においてやりとげた人だと思います」(『歴史を考える』文春文庫、1981年、163頁)。

司馬遼太郎さんの歴史観が100%正しいかどうかは別として、彼の考え方は私もいいなと思ったんです。つまり、ここで司馬遼太郎は、西郷さんを別にスーパーマンと見てるわけではないですね。普通の人間だ。普通の人間っていうのは自分中心に動いている。これが当たり前です。けれども、2%でも3%でも少し真空状態ができれば、それがその人の大きなキャパシティになる。それが西郷さんの魅力の原点じゃないかとおっしゃっているわけです。この文章を読んで私が思うには、西郷さんが言っている「敬天」の「天」というのは、もちろん空<sup>そら</sup>という意味じゃなくて、むしろ人間の心の中にできた2%か3%の開かれた状態。それが「天」といったらいいかもしれません。天まで開かれるような広い心、それはほんの少しかもしれないけど、それができれば大変なことなんだ。

先ほどの内村鑑三さんも西郷さんについて似たようなことを言っているんです。「のろまで無口で無邪気な西郷は、自分の内なる心の世界に籠もりがちでありましたが、そこに自己と全宇宙にまざる存在を見出し、それとのひそかな会話を交わしていたのだと信じます」。内村鑑三さんは、西郷さんはそんなに外交的ではなくて、アクティブな人ではなかったんじゃないのか。むしろ、「内気でのろまで」と言ってます。実像はどうだったのか、私はよく分かりません。大河テレビで見る限り、たいへんに穏やかな思いやりのある人だったということは、分かりますが、そんなに秀才タイプではなかったんじゃないか。しかし、何か自分の中で、天の声が聞こえるようなことがあったんじゃないかということを内村鑑三は何回も述べているんですね。それは特別な何か宗教的な直感ということでなく、心の中に深い2%か3%の空白があった。司馬遼太郎さんは、それは努力があつてのことと書いてますが、必ずしも努力によらないような、何かそういう開かれたものが人間の心の中にあるのではないかと思うんです。

### 3. 自分の容量と倫理的な課題—レヴィナスから学んだこと

#### (1)ユダヤ人の悲劇を背負って

先ほど述べたキリスト教の三要素の中の、ギリシア的精神に由来する「哲学」について触れることにしましょう。ヨーロッパから伝えられてきたキリスト教の根っこにユダヤ教があるのですが、西郷さんに見るような「天に開かれた」、「天」を敬うという精



神は、哲学でもプラトンやアリストテレスは「神」と呼び、それは西洋哲学史全体と通じて大きなテーマとなっていました。その神ということ、宗教とは別に哲学者たちがどう考えてきたのか。たくさん歴史の流れがあるわけですが、現代哲学者の中で一番印象的だった哲学者を皆さんに少し紹介したいと思っております。それが、レヴィナスという哲学者です。皆さんご存じの方も多いと思います。著書はほとんど翻訳されています。世界的にも盛んに研究されています。主著と呼ばれるものはずいぶん難解ですが、対談など、易しい本も幾つかあります。私もほんの少ししか勉強してませんが、この方はユダヤ系フランス人で、1995年に亡くなりました。名前からしてユダヤ人ですね。レヴィナスの「レヴィ」というのは、ユダヤ民族の中のレヴィ族に由来するものでしょう。レヴィナスは、もともとリトアニアの、旧ロシア、旧ソ連の出身でした。リトアニアのユダヤ人社会に生活していた人です。この方が、大戦中は、フランスにいたため、ユダヤ人として殺されるのを免れましたけれど、リトアニアにいた家族は皆さんヒトラーに殺されてしまいました。それをレヴィナスは後で知ったんですけれど、そのため、このレヴィナスという人の後半生は、このナチスの犯罪の本質を考え抜くことに捧げられました。

換言すると、ナチズムの人間観の批判です。ヒトラーの人間観が何であったのか、それを超えるためにどうすべきか、ということです。これを安易な言葉で表現してはいけないのですが、やさしく言えば、自分と異なった人間に対してどういう態度を取るか、ということに尽きると思います。自分と異なった、顔も文化も、宗教も全部違う他者。それは私たちにとってある意味ですべての他者はそうです。すべての他者は、レヴィナスに言わせると「異邦人」です。私から見て他者は皆、異邦人なんです。その異邦人とどういう関係を結ぶのか。異邦人が気に食わないから、自分とは違うから否定するのか、殺すのか。いや、そうではなくて違ってることこそ、その人を尊敬すべきだ、すべきものではないか。そういう他者の倫理、他者の人間観を徹底的に考えようとした人です。もっとやさしくいえば、他人と一緒に平和に暮らすにはどうしたらいいのかということです。これは私たちの毎日のテーマですよ。他の人と平和に生きていくにはどうしたらいいか。そんな当たり前のことですけど、無限に深いテーマ、無限に深まっていくべきテーマなのだと思います。私もレヴィナスという人の思想を全部知ってるなんてことは全然言えないぐらい難しいのですが、魅力があって、繰り返し読んできました。それは、他者と生きていくということが私たちの毎日のテーマだからです。皆さん、そうじゃないでしょうか。毎日、他人と一緒に生きていくわけです。「それって当たり前で、もう何の問題もない」って言われるかもしれませんが、実はそこに無限に問題があって、無限に深まっていくようなことだと思います。

## (2) 「あいさつ」の倫理

西郷さんは天の声を聞いていたんじゃないかといわれるんですけども、哲学的にいうと、神の声はどのように聞き届けられるのかということを、レヴィナスはよく問題にしました。これを一言で語るのは危険ですが、他者の顔、他者の声を通して神の声を聞くんだと言ってよいかと思います。神は、レヴィナスにとっては、もちろんキリスト教にとってもそうですけど、見えないものです。私たちは神を把握することはできませんが、しかし人間の顔と声を通して神の声を聞くことができます。どうしてかという、私と違った他者が絶対的な重さをもって私に呼びかけて来るからです。

哲学というと、どうしても難しいと言われて敬遠されますが、最も平凡なこと、生活の最も身近なものの中に最も大事なことが潜んでいることを繰り返しテーマにしたのが、この哲学者レヴィナスです。

例えば、他者とどうやって生きてくかということの一番身近な例は、毎日交わしているあいさつです。このあいさつは何なのか。あいさつしているときに私たちは何をしているのかということについて、レヴィナスは深く考察しています。

私たちは哲学を学ばなくても、子どものころから、あいさつについて訓練を受けてきました。例えば日本では、「人に会ったら自分からあいさつするんだよ」というふうに習ってきました。これ、不思議じゃないでしょうか。何で〈私から〉なんでしょう。そういうことについては、親は説明してくれませんでした。何であえて人に会ったときに自分からあいさつしなくちゃいけないのか。「お父さん、どうして」と聞いたこともなければ、説明されたこともないです。それほど、このあいさつは平凡かつ不思議なものなのです。説明できないけれど、みんな大事にしている。つまり、他者に先立って私が、他者のことを条件にしないで私がまず相手を尊敬するということです。

レヴィナスはこういう事態を「倫理」と呼んでいるのです。倫理というのは、私の好みや欲求、私の物差しなどとは関係なく、他の人が現れてきたときに、まずその人を大事にして、その人にあいさつすることである、と。あいさつするということはただ音を送ることじゃなくて、もし機会があれば、あなたのために力を貸します、あなたの幸福のために何かします、あなたの存在を喜んでいます、ということを含んでいるんだと。こうして、そのあいさつの中に、ある意味で倫理の全てが含まれてるとレヴィナスは言ってます。

## (3) 自他の不均衡

そうしますと、他者とは何かということなんです。私たちは小さいころからずっと、自分と他者は平等だという教えをたたき込まれてきました。それは間違いではないと思いますが、あくまで実現すべき社会的な目標であって、現実はそうなってはいない。

しかし、なっていないからそれが悪いことだとはいちがいに言えないのです。例えば、あいさつの中には平等という考え方はないんじゃないか、とレヴィナスは言うわけです。あいさつにおいては、自分と他者は、平等ではないんですね。他者のほうが私に先立って大事なものです。自他は平等というより、もともと不均衡なのではないか。実は他者の方が私よりも大事なんだ、とレヴィナスは言っているわけです。「そんなことはないよ。それはちょっとおかしいんじゃないか」と言うかもしれないけど、「いや、これが人間なんだ」と言っているわけです。私と他者が出会ったときに、他者のほうを大事にする。もちろん自分はどうでもいいということではないんです。そのように誤解されたことが多いのですが、「いや、自分が大事なものは、相手を大事にするから、それで結果的に自分というものも大事になるんだ」とレヴィナスは言うわけです。

こうして、だんだんと、レヴィナスの主張はマゾ的といわれるほどに他者中心になっていきましたので、あちこちから批判もされてきたのですが、レヴィナスはそれでも譲りませんでした。マゾヒズムと見紛うほどのありようの中に、かろうじて私たちの倫理が生まれる。倫理というのは、彼の言葉でも「善」とか「善さ」と言われるのですが、善さというのは、先ほどの西郷さんでいえば、98%、97%ぐらい自分中心であっても、残りの2%か3%の容量、開かれたものがあれば、これこそは善、善いものなのだと。ということで、そこに人間の隠れた可能性をみているわけです。

#### (4) 「異邦人」に向かう「倫理」

そもそも倫理というのは何でしょうか。レヴィナスは哲学の中で倫理は第一の哲学だと言います。普通の哲学の授業では、倫理学は哲学の一科目だといわれてきたんですけど、レヴィナスは、いや一科目ではなくて、倫理こそ「第一の哲学」だと言うのです。では、あらためて倫理とは何ですか。それは次のように説明されます。

「倫理、それはあなたにとって異邦人であり、あなたに関係ない他者が、あなたの利害にかかわる秩序にも、あなたの感情にかかわる秩序にも属さない他者が、それにもかかわらずなお、あなたに関係する場合の身の処し方をいいます」（『暴力と聖性』131頁）。

翻訳調で分かりにくいのですが、簡単にいえば、私の欲求とか私の物差しにかなわないような人間関係の中で、どういう態度を取るのか、という問題です。こちらの大学にも看護学科があり、そういうことが日常の問題になっていますね。患者さんに対して、例えば自分の親戚であるとか家族であるとかに関係なく、患者さんであるなら

ば、どんな人に対しても尊敬を示しましょう、どんな人に対しても心を尽くしてケアをしましょう、という姿勢が看護の倫理の中心にある考え方です。ここです。つまり、善いこととか、倫理はそういうことなんです。自分の好きなこととか、自分の欲求にかなう人だけを大事にするのは、それは倫理とはいわない。

レヴィナスの言葉にあった「異邦人」ということが印象的です。皆さん、すぐ思い出すと思いますけど、旧約聖書では「異邦人」、「孤児」（みなしご）、そして「寡婦」は三大弱者として、しょっちゅう聖書に出てきます。とりわけ「異邦人を大事にしない」といったことは、繰り返し、繰り返し出てきます。ですから、旧約聖書の倫理は異邦人を大事にする倫理なんです。レヴィナスはそれをよく知っていますので、自分の哲学にも繰り返し使うわけです。しかし、「異邦人」というのは別に外国人に限られていません。私たちはみんな異邦人です。皆さんも私も、みんな異邦人です。この世界に何か一人間違っ生まれてきたかのようにさまよって、ある種の違和感を持って生きているんだと。みんなが難民です。ですから、その異邦人という弱い立場の人を大切にすることが倫理だと言っています。そして、これが先ほど言ったマゾヒズムじゃないかといわれ批判されていますけど、レヴィナスは「違う。いや、この倫理、このマゾヒズムこそが人間性なんだ」とまで言うのです。人間であるということは、自分よりも他人のことをまず大事に気にかけるということなんだと。そうでなければ倫理というのはないんだと、繰り返し死ぬまで唱えていきます。

#### （５） 他者の死に対する責任

この他者中心主義は、ついには、他者の死に対する責任というところまで行きます。私たちは普通、本能的には自分の死のほうに重大問題だと感じていますが、しかし本当にそうでしょうか。実は私たちにとって一番重大なのは自分の死ではなくて他者の死なのではないか。例えば、この中にもお母さんの方がいらっしやうと思いますが、自分の死と子どもの死はどちらが重大ですか。「いややはり、私の死のほうに重大ですよ」とおっしゃらないと思うんですね。子どもの死のほうに重大問題じゃないでしょうか。でも、これは母子関係にとどまらず、全ての人だって実はそうなんじゃないか。

レヴィナス先生が1976年にパリ大学を退官する、その最後の年に行った講義の一つの主題は死についてでした。その最後の授業の最後の一節を紹介します。

「〈無限〉との関係は、死にゆく者に対する死にゆく者の責任です。聖書のある一節（『創世記』18章23節以下）にその例を見ることができるのですが、そこでは、ソドムの町のためにアブラハムが仲介者の役を果たしたことが語られています。アブラハムは他人たちの死に恐怖をおぼえ、介入することで責任を担おうとしたのです。そして

そのときです、アブラハムが『私も灰と塵にすぎません』と語ったのは。』（『神・死・時間』160頁）

「無限」とレヴィナスが使うときには、「神」について考えています。しかし、「神」という言葉を使ってしまうと、諸宗教・諸文化がありますから、先入観が入ってしまいますね。それで、より広い概念である無限という言葉を使っているのです。「〈無限〉との関係は、死にゆく者に対する死にゆく者の責任です」。この「死にゆく者」というのは目の前の他者のことです。それから「死にゆく者の責任」、これはその他者の前にいるこの私です。最後の言葉をもう一度引用します。「聖書のある一節にその例を見ることができるのですが、そこでは、ソドムの町のためにアブラハムが仲介者の役を果たしたことが語られています。アブラハムは他人たちの死に恐怖をおぼえ、介入することで責任を担おうとしたのです。そしてそのときです、アブラハムが『私も灰と塵にすぎません』と語ったのは」。この印象的な一節でレヴィナス先生のパリ大学での全ての授業が終わったのです。

旧約聖書を読んだことのある方は、この物語ご存じだと思いますね（創世記18章）。アブラハムの同時代に、ソドムとゴモラというとんでもなく墮落した町があって、神様がもう我慢し切れなくなって、この町を滅ぼそうということになります。アブラハムはそれを聞いて、そのソドムという大きな町の中に自分の甥にあたるロトの一族がいたこともあってでしょう、アブラハムは神様に一生懸命祈るわけです。「神様、この右も左も分からないような人たち、その人たちの中に正しい人たちがいるかもしれない。50人、正しい人がいるかもしれない。それでもこの町滅ぼしてしまうんですか」と神様に訴えるわけです。神様は、「50人いたら町全部を赦そう」と言います。しかしアブラハムは、もしやその正しい人が50人に満たないかもしれない、と思ったのでしょうか。その時です。「私も塵や灰にすぎませんが、あえて主に申し上げるのをお許しください」と言い、45人ではどうでしょうか。30人ではどうでしょうか。こういうふうにだんだん値下げしていくわけです。最後、10人になった。すると神様は「いや、10人善い人がいれば、滅ぼさない」と。

このエピソードの結論は意外なことに、この町が滅びてしまうことです。ですから、アブラハムの祈りがかなえられなかったのではないかというふうに見ることもできるのですが、実は、親戚のロトの一族だけは危機一髪脱出に成功します。

レヴィナスが目しているのは、祈りがかなえられたか、かなえられなかったか、ということではなくて、そのようにして一生懸命、滅びていく町のことを当然視しないで、神様に祈ったということです。そして、その祈ったときの彼の言葉、「私も灰と塵にすぎません」を特別に重視しています。自分もいずれ死にゆく者であり、はかな

いものだ。私たち、みんなそうですね。みんな塵と灰に帰るわけです。だから駄目なのではなく、塵と灰にすぎないにもかかわらず、私たちは他の人のことを考えることができるし、アブラハムはまさにそういう人だったんだ。

西郷さんじゃないですけど、全部100%立派である必要もないし、私たちは本当に灰と塵にすぎない、はかない存在だけれども、それでも他の人が死んでいくことを当たり前だと思っちゃいけないし、思えないということ。その人のために何かできる、何かしようとするというのが人間なんだ。

人間はみな自己中心的であり、はかないものであるけれども、それでも他の人を考えることができるというんですね。あるいは、そういう可能性があるんだ。これが人間性であり、倫理だと言ったわけです。

#### 4. 神の器である人間—トマス・アキナスの言葉から

最後に聖書的人間観を背景にしたキリスト教の人間観、特にトマス・アキナスについて触れたいと思います。

トマス・アキナスという人は皆さん聞いたことがあるかと思いますが、13世紀のドミニコ会の哲学者・神学者で、カトリックでは最も偉大な神学者といわれています。不思議なことに、先に触れたレヴィナス先生と700年隔てて、トマスもパリ大学の先生でした。この2人は時代も何もかも違うような哲学の雰囲気を持っています。トマス・アキナスはカトリックの神学者、レヴィナスはユダヤ教的な哲学者。彼は現代の哲学者で、最初フッサールとかハイデガーを研究していました。ですから、二人は直接縁がないのですけれども、不思議なことに今日話してるテーマ、人間の容量ということでは何か似たようなことをおっしゃっている。あるいは、トマスはもちろんキリスト教の神学者ですから、そういうことは当たり前かもしれませんが、今日一つだけ皆さんにトマスの魅力ある言葉を紹介したいと思っているのです。

トマス・アキナスはラテン語で冷静な文章をひたすら書いて、味気のない神学者だったと思われる節があります。たしかに、派手な文章はほとんど書きませんでしたが、時々、びっくりするような名文句に出会うことがあります。私、ある論文を読んでいて、「カパックス・デイ(Capax Dei)」という言葉に出会って驚きました。前後関係は特段に宗教的な話ではないのです。人間は生まれながら Capax Dei だ。Capax Dei というのは神を受け入れるものという意味ですね。「神の器」と訳したらいいかもしれません。Capaxは現代語でいうところの「キャパシティー」ですね。Deiは「神の」ということ。トマスの人間観はこれです。人間というのは神を受け入れる器である、と。今日のテーマでいうと、人間の容量は小さくみえるが、実際は生まれつき神を受

け入れるようにできているんだということです。そして、これが特別な人のことではなく、私たちみんなのことです。人間である限り全員が Capax Dei だと言っているところが大事です。たとえば人間の基本的能力として理性と意志があると言われてきたのですが、これは何を目指しているかという、結局は真理とか善という形で、つまりは神を受け入れようとしているのだと言ってるわけです。「えっ、本当ですか？」と、現代の人はなかなか納得できないかもしれませんが、とにかくスケールが大きいわけですね。

もう一つ、トマス・アキナスはこの神の受容が自分一人ではできるとは言ってません。ここがキリスト教の眼目でしょうか。それを可能にしてくれるのが、イエス・キリストという道です。イエス・キリストという方が私たちを神へと導くと。それで、ユダヤ教と違うのは、神があって、その神へ至る道はキリストだと。恵みがあるから、私たちは神を受け入れることができるようになる。恵みによるのですけど、しかし、その可能性はもともと人間の中にあると言っているのです。これはキリスト教の人間観とか教育観を考えるとときにとても大事です。キリスト教徒であるかどうか関係ないんです、全ての人間が神の器たるものと言っているんです。

確かに、よくよく見ますと、それが分かることがある。私の日々かわっている学生たちを見てみると、本当に驚くようなことを私たちに教えてくれることが何度もあります。「ああ、本当にこの子はキャパシティがあるな」と。普通の能力の物差しとちょっと違うような、もっと深いものですね。何かを直感的につかむ力がある。彼女たちが高い学費を払って教育を受けているのも、それはただ学歴を身に付けるためではなく、もっと奥深い無限のものを目指しているのではないのでしょうか。

「人間理性も独力では神の『何であるか』を知りえないが、『しかし他方、信仰に奉仕するものとしての人間理性は神の本質に到達するところまで、その『無限へのちから』が恩寵によって完成される、とトマスは確信していたのである」。

少し難しい言い方ですが、今述べたことです。私たちは自分の力で、人間の理性で神をつかまえることはできない。それをトマスは繰り返し述べています。そんなことはできない。神は神秘で、その実体が何であるかを、私たちは決して分かりません。しかし、恵みがあれば「無限への力」が完成される。この言葉ですね。人間には無限への力がある。「ヴィルトゥス・アド・インフィニータ(virtus ad infinita)」とラテン語でいいます。これは先ほどの Capax Dei と同じような意味。私たちの中にはそういう無限に開かれていく可能性があるんだということです。

今引用した文章、実はこれも鹿児島純心女子大学とのつながりがあるのですが、稲



垣良典という先生の御著書の中で見つけたものです。皆さんお聞きになったことがあると思うんですけど、先生は九州大学や長崎純心大学で長く哲学を教えてこられたトマス・アクィナスの権威です。私が一番尊敬する日本の哲学者です。素晴らしい本、多数お書きになっておられますが、『「存在」の形而上学』という本の中にある言葉です(88頁)。ここで稲垣先生は、現代の主流に逆らって、人間にとって神はいかに大事なものであるか、特別に宗教的な思想とかそういうことではなくて、人間というのはその神の存在の在り方へと開かれている、それほど人間というのは尊厳に満ちたものだ、ということをいろいろな形で説いている素晴らしい哲学者で、私もこの先生の本を何度も読んできました。

## 5. 書物の内面性とその可能性

先ほど読書が大事だと言いましたが、聖書は、皆さんよくお読みになっていらっしゃるかと思います。聖書は、一度読んで分かるようなものではありません。繰り返し、繰り返し読まなくちゃいけない。一般に書物というものについて、先のレヴィナスがこういうことを言ってます。書物はどんな内面性よりも内面的なものだ、と。内面性や心が大事だとか、良心が大事だとかいうのは当然なのですが、それよりももっともっと内面的なものは書物であると言っています。

あまりユダヤ人をほめるのは良くないかもしれませんが、何でユダヤ人があれほど多くのノーベル賞受賞者を生んでるのかということは、実はこの読書と関係しているのではないのでしょうか。とにかく彼らは読書や勉強を大事にするわけです。レヴィナスは、もともと書店の息子でしたね。彼も、子どものころから徹底的に旧約聖書とかを親に学ばせられる。ヘブライ語を学んで聖書を何度も何度も読むんです。繰り返し、繰り返し聖書、特に旧約聖書を読みます。そこから学問する態度も養われています。

表向きは地味であるこの文字は、読む人にとっては内面的なものです。そこで何が起きているかは外からは見えないわけです。読んでいる人の精神の中にしかその書物はないので、書物というのは最も内面的なものです。レヴィナスは、あるところでは、書物は人間の良心より深いものだと言っているほどです。それはどうしてなのでしょう。良心は大事なんです、ともすれば自己中心になってしまう。狭くなるんですね。ところが、やはり書物というのは、基本は自分から発したことじゃない。他の人が書いた書物を徹底的に繰り返し、繰り返し読む。そこで、深い内面性を得られる。

これが今日述べてきた容量ということにもつながっていくんじゃないのでしょうか。本当にいいものに触れて、いいものを読むということがどれほど大きな可能性を開く

のか。西郷さんも本を読んで、「敬天愛人」を悟ったんじゃないかと思われますね。私たちもいろんなことを通して、すぐれた書物や聖書を繰り返し繰り返し読むことを通して、容量が少しずつ高まっていくのではないのでしょうか。

聖書の中にある一つの言葉を、きょうの容量というテーマと関連させて紹介して終わりにしたいと思います。マタイ福音書6章6節に、「あなたは祈るときにどうしたらいいか」ということについてイエスが教えているところがあります。すごく単純にこうおっしゃった。「あなたに祈るときに自分の部屋に帰って戸を閉めて、自分の奥の部屋に入って戸を閉めて、そして、そこに隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そしたら、隠れたところをご存じの見ておられる方が、あなたの祈りに報いてくださる。」と。

私は学生に、この箇所が好きなので何度も教えてきました。なぜかという、学生たちは、当然のことながら友だちが欲しいという気持ちが強い。そういうことはもちろん大事なんですけども、私たち最後は一人ですね。孤独。孤独というテーマに私たちは向かい合って生きていくんです。

イエスの教えでは、自分の部屋の奥に入るということと神を発見することは同時になっていますね。つまり、「天」というのはそばにあるわけではなくて、私たちの奥の奥の奥にある。でも、奥の奥の奥にあるから深すぎて気が付かないと思うのですけれども、その隠れたことを見ておられる神がいる。先ほどからトマスが言っている Capax Dei ということともつながってきます。人間精神の一番深いところに神がいるんだということですね。普段は見えない、「神なんかは存在しない」とひとは言ってるわけですが、存在しないじゃなくて、私たちが自分の中に入ってないのではないか。

この教え、聖書を読むときにすごく大きな励ましになります。あなたがた一人一人の中に、一番あなたらしいあなたがいるところに神様がいるんだ。だから、自分の発見と神の発見は同じものだという。こうした自分の深さの発見は自分の容量の一番深い可能性を開くものじゃないか。キリスト教の特徴は、先ほど「塵と灰にすぎない」と言いましたけれど、そういう塵と灰にすぎないもの、そういう人間の中に炎が復活するような深い中心がある。これこそは、人間のキャパシティじゃないかと思います。

雑ばくな話になりましたが、今日の私の話を終わりにしたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

末吉:田畑先生、どうもありがとうございました。これから少し休憩の時間を取りたいと思います。10分ほど休憩させていただいて、始まりは3時半から行いたいと思いますので、よろしくお願いします。先生、どうもありがとうございました。

## 【休憩】

末吉: それでは、これから質疑応答の時間に入りたいと思いますけど、これまでの先生のお話を伺って何かご質問なさりたい先生方、職員の方いらっしゃいましたら、どうぞ手を挙げてお願いいたします。純心女子大学は4学科あるんですけれども、ことばと文化学科、こども学科、健康栄養学科、看護学科と、それぞれの各学科から先生方がいらっしゃってと思うんですが、今日のこのテーマで、この「ケアの精神とキリスト教の人間観」というこのテーマで何か期待されていらっしゃった先生方もおられるのではないかと思います。共感されたこととか、あるいはちょっと違和感を感じられたところとか何かあるかもしれません。遠慮なく、その辺を発表していただけたら。いかがでしょうか。大学院生の方もいらっしゃっているというふうに伺いましたが、院生の方も遠慮なく質問していただいて結構です。よろしくお願いします。

ちょっと私のほうからいいですか。先生、どうぞお座りください。このテーマで「自分の容量を超えて相手を」というのを初めて見たときに、しかもその後「ケアの精神」とこうありますので、特に私は看護師さん、医療関係のところにいいと思ったんですね。そうすると、自分の限界を超えて医療とかに奉仕するというのか、看護師として働くとか、そういうことをちょっとイメージしたんですけれども、でも先生のお話ではそういうことではなくて、自分の力以上のことというのは、それは自分の中ではなくて自分を超えたものに開いていますね。私は個人的には西郷さんの司馬遼太郎さんが書かれた私心というものが無いという、だからこそいろんな人を支えたんだという、そこも心に残ったところの一つなんですけれども、自分の容量を超えたっていうのは、何か自分の力いっぱい限界を超えて働いて燃え尽きそうになるとかそういうことを言われているわけではないんですね。

田畑: ありがとうございます。先ほど述べたように、レヴィナスという人はちょっと自虐的だというふうにいわれるんですけど、実はそうではなくて、レヴィナスも「あなたたちは、自分の限界を超えて考えなさい」というようなことを言ってるわけじゃないんですね。むしろ彼の倫理は「あなたたちは他の人の声を聞いてますか」ということです。そうすると、次にやるべきことは人の声を聞いてから出てくるわけで、むしろ問われている倫理なんです。脅迫されているわけじゃなくて、他の人に優しくしなさいということじゃなくて、「あなたたちは他の人の本当の声を聞いていますか」。声を聞いたら、なすべきことは分かってくるでしょうということですから、問われている倫理といったほうが正しいんじゃないかと思いますね。レヴィナス先生もそれよく言われていたみたいで、あなたの倫理はあまりにも何か正義に反しているじゃない

か。そうじゃないと思ってます。

もう一つ注目されるのは、レヴィナスが「顔」という言葉を使っていることです。レヴィナスの哲学のキーワードの一つなんですけど、「顔」(ヴィサージュ visage)は、皆さん経験しているように、弱いものなんですね。顔だけは裸で、この世の中に出てしまっていて、暴力をこうむることもある弱いものです。しかし同時にこの弱さの中に強さがある。どうしてかという、顔は「汝、殺すなかれ」と命じる神の啓示だからだと。その顔は「私のことを殺さないでくれ」、「私のことを独りぼっちにしないでくれ」と、私に命じているんだ。だから、強いものだ。神の声が他者の弱さの中に表れている。あなたはその他者の弱さを本当に見つめていますか。確かに、戦争で爆撃を加えている指導者は戦争で犠牲になる女、子どもの顔をほとんど見てませんね。ヒトラーはほとんど戦場に行ってません。一番偉い人は戦争の悲惨さを知らないわけです。顔を知らないから戦争ができる。レヴィナスは、その弱さをよく見つめ、そこから語られてくる声を聞くべきだ、そうすれば何をなすべきことが分かってくる。それを忘れたためにナチズム、軍国主義、全体主義の暴力が行われたんです。

ちなみにもう一つ、今日皆さんに紹介したレヴィナスの文献の中に『暴力と聖性』というタイトルの書物があります。これは、私が知る限り、レヴィナスの本で一番分かりやすい本なので、もし皆さんがお読みになるためには図書館とか、今、版が切れているかと思いますが、大きな図書館には必ずあろうかと思います。これは対談なので、とても分かりやすいです。そして、この言葉が大事ななんですね。暴力の反対は聖なること、聖性だと言ってます。自分より他者のことを考えることが聖なんだと。反対に、他者のことが認められずに、他者を殺してしまうことが暴力だと言ってるんですね。暴力と聖性というのは、その2つの現実を意味している。これは私たち世界の現実ですね。きょうの新聞でシリア政府軍の爆撃があったと報道されています。そして、この地上の地獄だといわれるほど女性とか子どもたちが殺されていますね。そういう、これは暴力そのものじゃないでしょうか。それに対して、じゃあ、私たちに何ができるか分かりませんけども、何かが問われていると思います。

末吉:ありがとうございました。他に何かありませんでしょうか。どうぞ。所属とお名前をお願いします。

成願:子ども学科の成願と申します。ありがとうございました。心の深いところのお話を、かゆいところに手が届くというか、すぐく分かりやすくお話を頂いたのですが、もっと聞いていたいと思うところでした。「倫理とく挨拶すること」というところで、「『おはよう』というのが祝福であり」ということで、翻訳なので、レヴィナスの

ところですが、「おはよう」と翻訳されてしまうと「早いね」ということなんです  
が、レヴィナスにしたらシャローム(šālôm)ということでしょうか。

田畑:原文はフランス語ですから、「ボンジュール(Bonjour)」です。

成願:そしたら、この訳でも合っている。ちょうど合っているということですね。分  
かりました。ありがとうございます。

田畑:フランス語だとボンジュールですね。ここにはボンという言葉が入ってますね。  
それは、「善かれ」という祝福になっています。ちなみに、ヘブライ語はシャロームで  
すね。これは「平和になるように」、同じような意味ですね。他者と平和の関係をつく  
るわけですから、同じ意味だと。

成願:一つ、平和をつくるということ、あいさつをこちらがすることというボンジュール  
とかシャロームとか祝福の言葉とか、とても積極的な行為だと感じます。例えば一  
方で、日本の場合は、西郷さんのところで「私心がないこと」ということがあったんで  
すけれども、日本人の霊性ということで、無心という、心が無いという、無心という  
言葉は日本人の霊性の一つだということで語られていますが、無心というのはちょっ  
と消極的な感じがするのですが。

ボンジュールとかシャロームとか相手を祝福するというのが、積極的な行為が、あ  
いさつの言葉がそれを示している文化と、日本では「おはようございます」って言っ  
て「早いですね」という言葉を使いますね。それと対比して、西郷さんは私心がないと  
いう、他者に向かうというよりも私心がないという言葉を使っている。一方で、日本  
人の霊性の中では、無心という、心が無いと書いた無心ということが霊性だといっ  
ていることを聞いていて、西郷さんの私心がないのは無心なのかなと思ったんですけ  
れども、そのような日本人はそれほど積極的に、文化的には積極的に他者に関わって  
いかない、けれども何となくというか、他者とつながっているという感じなのですが、  
その辺りの文化の違いとか、その辺りを先生はどのようにお考えか聞かせていただ  
けたらと思うのですが・・・。

田畑:はい、ありがとうございます。とってもよい問題意識じゃないでしょうか。私  
も日本の古典とか少し読んでみると、おっしゃるとおり「無」という言葉がよく出て  
きますね。仏教でも無がすごく大事なんですね。諸行無常とか、無というのはネガ  
ティブに聞こえますけど、そうじゃないんですね。無は「空」とも表現されます。空こそ全

てを含んでいる。「色即是空、空即是色」って言いますね。空というのと色というのは一体化している。見えるものと見えないものが一体化していると考えています。日本の古典などではおっしゃるとおり無心とか、それから『源氏物語』なんかでは「何心無く」というのが最高の在り方なんです。「何心無く」というと、とても消極的に聞こえますが、何ということがないという状態が一つ悟りのように使われたりします。ですから、一見、消極的に聞こえますけれども、そこにはやはり先ほど言った、自我がないとか私心がないというのは、その裏側にはすごく積極的なものを含んでいる。可能性としてキャパシティが含まれているんじゃないかというふうに思います。

そのことは実は聖書の中でも、似たようなことがあります。例えば、シスターもご存じのパウロの愛の讃歌、コリント人への第一の手紙の13章に「愛は何々だ」とありますね。そのとき、例えば「愛は妬まず」とか、「愛は怒らず」とか、というふうに「何々せず」という否定の形で表現されています。肯定的にはあまり言いませんね。ですから、妬まない、非礼をしないという、何々せずという否定的なことがすごく大事にされています。たとえば、誰かを妬まないというのは、特に目立つ行為ではありません。私が誰かのことを妬まないからといって、「あなた、妬まなくて偉いですね」とは誰もほめてくれない。つまり、見えないことですね。見えない愛の存在をパウロは何行にもわたって「……せず」と言ってますね。その否定的な言い方の中に実は愛の最も深い、目立たないけれども穏やかで、何ていうんでしょうか、押しつけがましさのない姿について述べているんじゃないかと思います。もちろん文明の違いがあるので、ちがいはあるでしょうが、否定的な言い方の中に深いものを表しているのは東西に共通しているかもしれません。

キリスト教は十字架の宗教だといいますよね。別にキリストは十字架上で何か積極的なことをしてないですね。何もできなくなるということそのものです。何もできないけれど人の苦しみを背負って亡くなっていきますから、見たところ完全に敗北で、それは見たところ、受身的な愛ですけど、実はそれこそが最高の愛だと聖書は教えていますから、否定形の中に肯定的なものがあるのではないかと思います。

ちなみに、キリスト教神学の歴史の中に2つの流れがあります。一つは「肯定神学」といわれる。それはもちろん積極的に神についてこうだ、ああだと表現しようとする考え方、つまりポジティブな神学がある。他方、「否定神学」という立場もあります。それは神を否定するという意味ではないのですが、例えば、私たちは完全に神を知ることができない、という言い方は、あのトマス・アクィナスですら言っていたんです。その「何々できない」ということの中に、人間の能力の限界の自覚があります。そのように否定的な表現の中に実は神の偉大さや超越性といった深い意味がある。こうして、肯定と否定の両方が相まって、真の神学が生まれるというふうに考えてきたのではな

いかと思います。

今、シスターのご質問とつながって、否定的に見えるけれども実は深いものがある、ということ、それは、日本文化を考える上でも、とても大事なことはないかと思います。

成願:ありがとうございました。もう一つ質問なんですが、最初に先生が最近お書きになったエッセーで、『源氏物語』とか西行などを扱ったっていうご本、もしよろしければ書名を教えてください。

田畑:一番新しいのは、『「心豊か」に生きるヒントは古典にあり。』(三笠書房)です。

成願:ありがとうございました。

末吉:成願先生、ありがとうございました。他に何かご質問はありますか。

岡村:レヴィナスというのはユダヤ教徒であるということですが、彼の「他者へ伝えるとか、他者を大切にする」という言葉を聞くと、レヴィナスは他者の中に、神の姿を見ているのではないかと想像します。例えば教職員であれば、学生一人一人の中に、あるいは他の教職員一人一人の中にキリストの姿を見る、あるいは神様の姿を見るということはとても大切なことで、だからこそ学生一人一人を、教職員一人一人を大切にしなければならぬという思いをつよく感じることになるのですが、自分の容量を超えるという意味では、そういう他者の中に神が存在するっていう考え方が、容量を超える一つの手掛かりになると考えてよろしいのでしょうか。

田畑:レヴィナスはまさにそのことを問題にしたわけですね。私たちは直接神を見ることはできないし、レヴィナスはユダヤ教徒といっても、あまり信仰のことを述べていないです。信仰より大事なのは倫理だというふうに、おっしゃった人ですね。神を信じますというだけでは駄目だと言うんですね。そうじゃなくて、目の前の隣人に対してどういう態度を取っているか。先ほどから言ってますね、他者の顔の声を聞くということは神の声を聞くことなから、その行為を通してかろうじて人間は神の在り方を生きることができると言うふうに言ってると思います。

それから、もう一つ、最初におっしゃった、レヴィナスはキリスト教徒ではないので、キリストについてあまり触れていません。ユダヤ教とキリスト教の違いは何かデリケートなものがありましたから。しかしこのレヴィナスですら、例えばキリスト教のことについて触れていることはたくさんあります。例えば、皆さんも聞いたこと



があると思いますが、『マタイ福音書』25章に「最後の審判」についてたとえ話があります。そこでイエスが一つだけ言ってることは、ご存じのとおりですね。あなたがクリスチャンであったかどうかは救いの基準ではないんですね。あなたが最も小さい者の一人にどのような態度を取ったか、これが実は審判者に対する態度であり、それだけが審判の基準なのです。審判者とは、キリストとのことだと思いますけど、これをレヴィナスは引用しています。新約聖書にこうあるじゃないか。そして、こう彼は言うんです。私が追い出した他者、私が誰か他者を粗末にしたり、追い出したりするんだったら、それは追い出された神に等しいんだと。ですから、今、学生とかとおっしゃったんですけど、私たちが向かい合った一人一人は神とほとんど同じ、全く同じだと言ったら言い過ぎかもしれませんが、神を表しているんだ。だから、追い出してはいけないんだとレヴィナスは言ってると思います。よろしいでしょうか。

山本:私は看護学科の山本といいます。若い看護の学生さんに死生観ということをちょっとお話ししたりとか、少しやってはいるんですけども、今の学生さんの臨時実習というのは意外とがんの末期の方なんかも関わっていかなきゃいけなくて、そういうふうなことがあるので、その前に少し早めに話をしたりするんですね。もちろん、若い学生さんのためには、死生観といわれてもなかなか実感できるものではないし、それは当然だと思っているんですが、その中で他者の死の主観化という話なんかを少し加えたりとかやってますので、テキスト的にはあれなんですけど、副読本として読んでいただいたりとかしてやっています。そういう若い学生さんに、もしそういう緩和ケアに行くに当たってとか、そういう何か1つ2つ重要なことを、こういうところを何か伝えていればいいのだということがあれば、ちょっと教えていただきたいのですが。

田畑:ありがとうございます。大きな問題であり、臨床の人間じゃないのであまり分かりませんが、一つだけ感じてることはあまり学生たちに多くを期待をかけちゃいけないんじゃないかと思いますね。つまり、学生たちはそれでなくとも大変で、重荷を背負って実習に行ってますので、あまり難しいことを教えてもかえって消化ができないんじゃないかと思いますけど。最近私も経験したんですけど、学生に今の古典、西行さんの和歌をちょっと紹介して、そしてその中で学生たちに自分の一番好きな和歌を選んで、2つぐらい選んで、感想を書いてくださいという、そういうリアクションペーパーを作ってもらった。ある学生は、こういうことを書いてくれたんですよ。西行さんは仏教のお坊さんだったんですけど、宗教者としての直接の発言はあまり残されていません。和歌はたくさん残ってますけど、どういう説教をしたかとか、ほとんど

ない。その和歌の中で特徴的なのは、例えば死にそうになっているコオロギの声をずっと聞いていて、「ああ、コオロギの声が低くなったな」とか、そういう命が弱っていく、枯れていく、そういうふうな命がだんだん消えそうになっていくことについての歌をたくさん残しているんですね。たとえば、こういう歌があります。

きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく(『新古今和歌集』 472)  
(こおろぎは秋の夜寒で弱ったにちがいない。だんだんと声が小さくなっていくことだ)

学生はこれを読んで、こういうことを言ったんですね。西行さんはお坊さんだったけれども、小さな命を丁寧に見つめることによって、それが結果的に読む人の救いになっているんじゃないか、と。私、びっくりしました。そんなに、私、立派な授業しなかったんです。学生が読み取ってくれたんです。つまり、大事なものは何か命への姿勢について、「あなたはこうしたほうがいいですよ」とか言うことではなくて、その消えそうな命をどれだけ丁寧にみつめていくか。そして、西行さんだから、歌にできたわけですが、学生たちがそういう消えていく、弱っていく命に対して丁寧な眼差しを注ぐ。そういうふうな命に対する眼差しというんでしょうか、それだったら誰でもできるわけですね。丁寧に患者さんのことを見つめる。患者さんの声を聞くとか。それで、それが直接的な救いなるかどうか分からないけれども、もしかしてこういうことのほうが助けになるかもしれないですね。そういうことをさっき話したので、やはり命を、一人一人の命を丁寧にみつめる、そして命の声を聞く。命の声調を聞く。声の調べというのがありますね。

末吉:ありがとうございました。他には? 他の学科からの先生もまた何かあればお願いしたいと思います。

加藤:今日はありがとうございました。質問ではない感想なんですけど、先生があいさつの中に倫理がある。レヴィナスのことを紹介してくださって、このプリントの中に「倫理とく挨拶すること」という項目の中で説明してくださったのですが、私は非常にこのあいさつというのは表面的にしか捉えてなかったなあということを今日のお話の中で考えさせられました。通常、学生さんたちにも「あいさつは人間関係の基本だから、ちゃんとあいさつができる人になってくださいな」というふうに言っているのですが、ただ単に人間関係の基本という、人間関係の一つであるということのもっと深い意味ですかね、このあいさつと倫理という、そういう観点で捉えてなかったも

のですから、今日、先生のお話を伺って、あ、本当に深い、人間はもっと深いところにある、そういった深みがあるものなんだなあ。ただ単に人間関係をスムーズにするというだけのものじゃないんだな、倫理というそういう深いところまで届いているものなんだなあということを今日、教えていただきました。ありがとうございました。

田畑:今の加藤先生のお話なんですけども、ちょっと関連してレヴィナスはこうも言っています。「お先にどうぞ」という、この他者最優先の中に聖なるものがある。聖性。私たちよく言いますね。エレベーターに乗るとき、「お先にどうぞ」と。不思議なことです。例えば、私が先に入ってもよさそうなもんです。ですが、そのことについての説明がない。説明もしないし、「どうしてそうなのか」と聞きもしません。あいさつもそうです。どうして、私が先にあいさつしなくちゃいけないのかって、そういう思考が成り立たないっていうか、私はそれを問題にしていない。それを問題にしないところが倫理だと言ってますね。つまり、理屈抜きで私たちは他者を大事にしているんじゃないか、あるいはすべきなんじゃないか。

それで、あいさつだけでなく、あらゆるコミュニケーションがこの「おはよう」ということに含まれている。今、あちこちでコミュニケーションが問題になってます。「おはよう」とか「ボンジュール」とかの中に、そのコミュニケーションの意味が全部含まれているんだとレヴィナスは言っています。皆さん、お子さんたちも、もう何もできなくてもいいから、あいさつだけはしなさいよ、と教えたら、ちょっと極端かもしれませんが、皆さん成功しますよ。あいさつができるっていうことはすごいことです。社会的にもポイントは高いですね。いくら学歴があったとしても、あいさつできなければアウトですね、世の中では。本当にそうなんです。もちろん、いろいろなことを勉強しなければなりませんが、あいさつに含まれている他者優先の考え方が大事だということです。

末吉:それでは時間も押しておりますので、質疑応答の時間はこれで終えたいと思います。では、最後になりますけれども、今日のご講演いただいた田畑先生への感謝の言葉といたしまして、当大学の副学長・影浦副学長よりごあいさつを申し上げたいと思います。影浦先生、よろしくお願いいたします。

影浦:田畑先生、今日は大変ありがとうございました。東京から、予定に加えて何か90分立ったままでお話を頂いて大変恐縮でございます。大変、ありがとうございました。どうぞ、先生、お座りくださいませ。先日、岡村センター長から終わりのあいさつをお願いしますという依頼がございまして、ちょっと気の利いた終わりのあいさつ

をしようと思って一生懸命聞きましたけど、頭の中でぐちゃぐちゃになって、さまざまな思いがあります。それは私がどういうことがぐちゃぐちゃになっているかということ、ちょっとお話をしてお礼の言葉と思っております。

最初、これを見たときに「自分の容量を超えて」、あ、自分の容量って何だろう。どうして計るんだろう。自分の容量は何を通して分かるのかなというようなことが、お話をお聞きする前に感じたことでございます。お話を伺いながら、あ、自分の容量というのは他人との関わりによって、あるいは他人を大事にすることによってその容量が判断されるのかな。あるいは、自分の容量というのは広げていけるものなんだろうとか。それから、他人のために何かをさせていただくということ、それで自分の容量が広がっていくのか。あるいはまた人間の容量が大きくなると、2%の空間がさらに大きくなっていくものなのかどうなのか。それから、オリンピックの話の中に人間の技能とか能力の開発というようなことがちょっとおっしゃいましたけど、人間の心の開発というのがどういう感じだろうか、私自身、結論を得ないまま、ぐちゃぐちゃになりまして、非常に貴重なというか、深い、私にとっては触れたことのないような、ちょっとこまごまと複雑なというか、興味のある、頭の中がぐちゃぐちゃしてるんです。実は新幹線で通勤をしておりまして、それは通勤の中にかみしめてちょっと考えさせていただこうかなと思っております。大変、私にとっては有意義なお話を伺うことができました。ありがとうございました。心からお礼を申し上げます。(拍手)

末吉: それでは、今年度のキリスト教文化研究センター公開セミナーをこれで終了させていただきます。長時間のご講演いただきました田畑邦治先生、本当にありがとうございました。(拍手) また、教務のお忙しい中、このセミナーにお集りいただいた先生方、本当にありがとうございました。これで終了させていただきます。